

## 小さな路に入って

1995年の夏、私はイーニンの街に着いた。バザールを調べる予定で、北京で知り合っていた友人の家族の紹介で郊外に住む家を見つけた。ウルムチで言葉も学び、人々との会話がスムーズになり、次第に友人の家族、街の人に溶け込んでいった。

今までのウイグル研究はナショナリズムや漢人との関係に偏っていたと思う。私はウイグル人の日常生活に焦点をあてた。地域共同体、ジェンダー、家族、友人、仕事、宗教などである。庶民はウイグルの知識人ほど、民族性、マイノリティの地位には関心がない。

第1部ではローカル（地域）の重要性、第2部ではジェンダーとライフサイクル、第3部では市場、第4部ではウイグル人のイスラムについて記述した。資料はほとんど人々との会話の記録からである。

### 第1部 ローカル 隣近所、街、市を扱う。ウイグル語のマハツラ（コミュニティ）がそれに当たるだろう。

#### 第1章 豊かな家—ウイグルの隣近所（ザワット=マハツラ）の住居とアイデンティティ 祝福された境界：自由自在な所帯

オイは世帯とかまどを表す。世帯を持つことは結婚と同じ言葉。家の建物はどれも同じようである。床は土が地面から数フィート高くしてある。壁はレンガ造り。平らな屋根は簡素な作りである、梁の上に棒をわたし、その上をワラ、粘土を置き、砂利などがバラまいてある。夫婦の住居は2つ部屋が基本である。一つが家族用（ダラン）、そこをリビング、寝室などなんでも使う。二つ目が客間（サライ）である。

アビデム・ナスレディン（女性）、長男（ヤクップジャン）の世帯と一緒に。彼女の部屋は、木のテーブル、濃い緑で塗ってある、チェストの上に毛布、40ワットの電球がぶらさがっている。ダランはスーパ（土間でフェルトが敷いてある）とタブサ（レンガが敷いてある、かまどがある）に分かれる。

家で座るところも、社会的地位で決まっている。サライは使われないときは物置代わりになっている。春の温かいときに、かまどを掃除する。煙がスムーズに登ることはいかに家がかうまく行っているかのしるし。マハツラの住民は家庭で作られた食べ物は力を与えるが、外で買い、食べるものは人を弱くすると言われている。

変わりゆくライフスタイル：

マハツラに2階、3階建ての家が増えた。もう一つは国に雇われた人の郊外の集合住宅（ウイグル人は少ない）1990年代 ウイグル人も豊かになり新築の家が増えた。漢人の移住が増え、家を建てる土地は多くはない、ウイグル人の人口は増え、子供たちは同じマハツラで家を建てようとするが土地はない、そこで3階建ての家が増えた。漢人の建設業者が送り込まれた。アビデムの義理の息子は金持ちになって、じぶんの息子たちの結婚に合わせて5万元（6千ドル）でえ家を建てた。

...

中略

...

#### 第4部 マハツラのイスラム：ウイグル人の宗教実践の社会的次元

1990年代、マハツラのイスラム実践は漢人との民族対立において考えるべきだが、かれらの宗教実践はイスラムが世界的に大きなトラブルのタネにされていることを背景に複雑化している。単に中国政府との対立に還元するのは単純すぎる。政府はイスラムを犠牲の羊に

しようとしている。このような状況で新疆でイスラム実践を調査研究することなどとうていできない。暴風に向かってつばをするようなものだ。

カシュガルの支配者 satuq bugra khanが934年にイスラムに改宗して以来、新疆はイスラムの国である。1990年代、共産党の規則でイスラム実践は制限されてはいるが、イスラムへの関心は逆に高まっている。

## 第11章 偽りのハジムと悪いマッシュラップ ウイグルイスラムの信心と政治

「18歳以下の若者は宗教的活動に参加し、科学的な世界観が欠如している。小中学生は違法なコーラン学校に通い、通常の学校教育の妨げになっている。コーラン学校に通う生徒は不健全な考えに染まり、民族団結を害するようになる。：政府の調査」

新疆で一番の脅威は何か？ 1、民族分裂主義。 2、経済成長の欠如、 3、不法な宗教活動  
4、わからない。

1990年代、イーニンではイスラムの信仰に関する印刷物が多く売られていた。日々の信仰の実践の仕方が書かれてあり、マハッラの人々はそれを行っていた。

マハッラでは俗的な活動として酒飲みマラソンがあり、男らしさを競う。しかし少ないがマッシュラップや祈りの活動も増えている。かれらはイスラムの実践をいかにして生活に取り入れているか？イスラムのアイデンティティのしるしを自己の提示のなかに取り入れているか？